手術場の看護婦が作っていたツッペル

No.16

ツッペル

看護用品の解説

ツッペルは，外科手術において組織を剥がすのに用いるガーゼであり必需品である。小さく切ったガーゼを何枚も重ねて 1～1.5 ㎝の正方形にしたものを丸めて周囲を縫ってつくった。

看護用品にまつわるエピソード

ツッペルを使用する際は，ガーゼの縫い目のない部分を鉗子で挟んで持ち患者の組織を剥がした。手術室の必需品であったため手術場の看護婦は，空き時間を利用して作業にあたった。使いやすいツッペルをつくるために，医師が患者の組織を必要以上に傷つけることがないよう，適当な厚みに圧縮し丸められたものを作った。

（立津千代子，2004）

解説

1955（昭和 30）年に日本本土より肺外科専門医を招聘して肺外科手術ができるようになった[1)]。立津さんの体験談は，肺外科専門医を招聘が再開された 1960（昭和 35）年頃の宮古病院の手術場での話である。この頃は未だ，衛生材料や医療用品が十分でなく看護師の仕事の一部として衛生材料の作成が行われていた。作る際は，それを使う医師や患者の立場を考えて作っていたことが伺える。現在，使われている既製品のツッペルは 1 ㎝位の大きさで面が均一になっている。

1）稲福盛輝：沖縄疾病史，第一書房，P302ーP303，1995.

（名城一枝，2004）